

原舶來ナレドモ、今本邦ニ多シ、形鳥ニ似テ小ク、全身黒色ナリ、只風切リノ本徴シ、白シ、翅ヲ開ケバ白色、左右ニ長ク並ビテ、八ノ字ノ如シ、故ニ八八鳥ト名ク、卽釋名ノ嘲嘲鳥ニシテ、嘲八同字ナリ、喙脚黄色、目赤黄色、喙根鼻上ニ少シカタマリタル毛アリ、贅ノ如ク高ク出、是蘇恭有幘ト云モノナリ、ソノ性能諸鳥ノ聲ヲナス、舌ノ端尖リテ鍼ノ如シ、此尖ヲ剪テ教レバ、能人言ヲナス、ソノ剪法教法、詳ニ秘傳花鏡ニ出、閩書ニ又有白色者、差小、泉人謂之番鸚鵡ト云ヘリ、

〔百千鳥^上〕八々鳥 八歌鳥共

餌かい

ハヤ

四分、青味入、

鳥の風和のむく鳥のごとくにて、また大なり、總身黒く、口喙薄淺黄にて、足も又黄にさめたり、額の毛、喙の上へつまみたるやうに、立出てかわりたる物なり、よく物まねを囀鳥有、若鳥は眞似ぬ物なり、巢も能なす鳥有、玉子は十三四日にて開出る也、子かへりては、蜘蛛を飼ふべし、是又十日程にて、巢よりとりて、すりゑのさし餌にて飼立る也、二三日は兎角、うなぎの粉を交て飼立るがよし、巢くさは、枯芝、ところの毛亦は木の根の類、兼も入たるがよし、鴨の毛、杯もひく物也、とかく巢に作るつき物、いろく入置べし、巢箱は、奥行八九寸程、横五六寸程、高さもまた六寸ばかりの箱を作り、穴を出入の成ほどに、明文鳥の巢箱のごとく、柵を釣て其上へ置なり、

〔飼鳥必用^中〕八歌鳥

此鳥不絶長崎へ相廻り候鳥にて、心有人皆ゑる處也、總羽黒にて、大羽の中白き府あり、目は淺黄にて、蓮雀あり、喙足薄黄にて、少しは物眞似もする、略中飼方は、魛にて三分餌也、

〔續日本紀^{十一}〕聖武天平四年五月壬子、新羅使金長孫等四十人入京、庚申、金長孫等拜朝、進種々財物、

并鸚鵡一口、鸚鵡一口、略下

喉紅鳥

〔大和本草^小〕五喉紅鳥

山中ニアリ、ヨシドリニ似テ、ノドノ下紅也、又ツグミニ似タリ、ツグミノ

大サアリ、里ニモ出ル事アリ、中華ノ書ニテ未見之、